

博士論文（要約）

戦前・戦後日本における知識人論と文学史についての研究
——社会運動と文学運動との関連を中心に——

木村 政樹

本論文は、戦前・戦後日本における知識人論と文学史を、社会運動と文学運動との関連を中心に考察したものである。

はじめに、序章で問題の設定を試みた。本論文では、知識人とはなにかを問うのではなく、「知識人」に関連することば（知識人関連語群）がいかに用いられたかを問題とした。知識人関連語群と文学史が接合する言説は、社会運動・文学運動と関連しながら、戦前・戦後日本において重要な意義をもったと考えられる。その意義は、エンツォ・トラヴェルソが用いたハンナ・アーレントのことばを借りていうならば、「隠された伝統」として捉えることができる。本論文は、この「隠された伝統」の諸相を明らかにしていくものである。

第一部では、明治期から大正期に至る、初期社会主義と文学の関係に焦点をあてて論じた。この時期、ロシア文学史の書き手や、『近代思想』や『月刊新社会』に集まった社会主義者たち、大逆事件の弁護人かつ作家であった平出修らによって、知識人関連語群が用いられていた。また、それはしばしば文学と結びつけられて使用された。それらの言説を分析することによって、知識人関連語群の運用が、ジャーナリズムにおける批評的な行為として浮上していたことを示した。とりわけ、その背景に大逆事件の問題があることに注目した。知識人関連語群が文学イメージと結びつくにあたっては、ロシア文学に関する知の流通と大逆事件という出来事という大きな文脈が介在していたのである。

第二部では、有島武郎と「知識階級」論を中心的なテーマとして論じた。有島は晩年に、「宣言一つ」をはじめとする評論を発表したことで知られている。その思想的意義についてはさまざまに論じられてきたが、ここでは従来注目されてこなかった点について考察を進めた。まず、「宣言一つ」論争を、「知識階級」とはなにかが問われたものとして捉えることによって、有島の主張が対話的に更新されたことを示した。次に、労働社グループの一員である吉田一との関係に注目しつつ、有島の思想が当時のアナ・ボル提携の動向と関連したものであることを論じた。そして、有島の評論とマルクス主義者のテキストを突き合わせて分析することで、当時における階級概念の構築の諸相を明らかにした。

第三部では、プロレタリア文学運動と文学史の関係に注目して、いくつかのテキストを論じた。まず、宮本顕治「敗北」の文学について、「芥川龍之介」を左派陣営の文脈で位置づけようとする文学史の試みとして考察した。次に、平野謙「プティ・ブルジョア・インテリゲンツィアの道」を、プロレタリア科学研究所芸術学研究会と明治文学談話会との関係に重点を置いて分析した。平野のこの批評は、当時の文学研究の場において「敗北」の文学の論理を引き継ぎ、再提起する実践としてあった。最後に、一九三五年の中村光夫の文学史の論理を分析し、ペーター・ソンドイがいうところの「体系的な文学論」として構築されたことを示した。いずれも、文学史という営為が、当時の文学運動の動向と不可分に関わっていることを明らかにした。

第四部では、『近代文学』同人の批評を対象とすることで、その主張だけでなくリテラシーの位相についても考察した。まず、戦時期の荒正人のロシア文学理解を検討しながら、同時代において周囲の批評家に共有されていたロシア文学の知識がどのようなものか分析した。次に、平野謙の「昭和文学のふたつの論争」が、戦後「政治と文学」論争の相手であった中野重治との関係

のなかで書かれたことに注目しつつ、概念論としての特徴をもっていることを論じた。最後に、本多秋五が一連のプロレタリア文学論を通して文学史を再構築していくさまをみた。以上を通して、『近代文学』同人が文学史というかたちで展開した思考のあり方と、その周辺の知的状況を明らかにした。

終章では、これまでの考察をまとめ、戦前・戦後日本の知識人論と文学史の展開を叙述した。本論文で行ってきたのは、地層のように堆積していく文学に関わる知識の位相と、作家・批評家の歴史的な思考の位相を関わらせて読解することであった。その試みを通して、従来の考察ではみえてこなかった知的環境と、それに応じた言説の特徴が明らかになった。「隠された伝統」としての知識人論と文学史は、言論弾圧が激しい状況のなか、活動拠点を作り出しつつ局面を提示しようとする営みとしてあったのである。

なお、本論文は五年以内に出版予定である。